

「意識を物理的に理解するとはどういうことか」 (ニコラス・ハンフリーの物理主義とともに)

大橋雄太郎 (OOHASHI・YUTARO)

元 システムエンジニア

本文

まず、ここで述べる意識とは現象的意識についてであり、他のことではない。今日十数年前とは違って、多くの意識研究者は、意識は物理的に発生するものであり、超自然的な何かではないということに同意するであろう。しかし、ひとたび意識を物理的に説明しようとする、とたんにその糸口さえもままならない状態である。そんな中で、ニコラス・ハンフリーはその糸口を提示しようと勢力的に研究を続けている一人である。近年、書店を見てもめっきり意識に関する著作が減った中、彼は「赤を見る」、「ソウル・ダスト」と立て続けに著作を発表している。そして、その中心的概念が、物理的に意識を理解するにはどうしたらよいかということである。いわく

- 1) 意識はどれほど捉えどころがなく謎めいていようと、科学的見地に立てば自然界の事実だ。
- 2) 物理的には意識ある人間とそっくりだが、意識を完全に欠くという哲学的ゾンビの概念は愚かだ。
- 3) 意識があるとはどのようなことなのかを記述するのは原理の上では可能なはずだ。
- 4) 多くの哲学者がするだろうように、意識は本質的にいわく言いがたいと主張したら、人間の創意工夫の才を見くびることになる。
- 5) 意識の真相は、もし適切な視点から眺めたときには、じつは、とてもありえそうにない生物学的エンジニアリングの成果であることがわかると私は主張したい。(以上、「ソウル・ダスト」(2012) 柴田裕之訳、紀伊国屋書店より抜粋)

といった具合で、その研究態度はほとんど意識の謎を解明してしまったかのような勢いである。しかし、それにもかかわらず、彼の意識の説明は、今ひとつ不評であると思う。なぜなら、彼は自然科学的に意識を説明できると主張しながら、物質からどのようにして意識が発生するのかを全くといってよいくらい述べていないからである。彼は、「意識は自分自身が作り出すものに違いない」と強調するのだが、だからといってその現実的な発生の構造のようなことには全くふれず、「ソウル・ダスト」では、進化論的ななぜ必要になったかを強調するだけである。確かに意識が単なる随伴現象ではなく現実的に意味あるものだという点を解明することは意味あることではあるが、それは意識が物質から発生するということを何ら説明するものとはならない。

では、なぜ、彼の意識論が意識発生の説明にならないか、彼の言質から解明しようというのがこの研究の目的である。そしてその結果、意識を物理的に説明するために、従わなければならない最低の、そして必須の指針となるテーゼは次の3つだと考えることになる。

1) 意識は物理的に説明できる

2) 意識を物理的に説明するときには意識の主体を前提にしてはいけない

3) 物理的な力や物質はそれを認識する主体(人間や動物)がいなくてもそれだけで存在する

この3つを遵守することで、意識を物理的に説明する糸口が開けることを期待する。